

キワニス社会公益賞 NPO法人「e-ライフサポート」



平塚恵一さん

社会公益のために貢献してきた団体、個人に贈られる第39回キワニス社会公益賞(横浜キワニスクラブ主催)に、障害者への福祉サービスや相談業務に取り組むNPO法人「e-ライフサポート」(鎌倉市)が選ばれた。来月2日に横浜市内のホテルで授賞式が行われるのを前に、同法人の活動を紹介する。

「障害者が一人の人間として生きていくうえで、『受け皿』が必要だ」

障害者の働く場や生きがいのある「地域活動支援センター」などを運営する「e-ライフサポート」理事長の平塚恵一さん(63)は、こう語る。

鎌倉市職員として障害児の療育相談などに携わる中で、「養護学校を卒業した障害者の行き場がない」という事実を目の当たりにしていた。成人した障害者を受け入れる施設が少なく、自宅に閉じ籠もりがちになるケースが多かった。

「成人した障害者がどう生きていくかが大きな課題

障害者に「生きがい」の場



「e-ライフサポート」の支援センターでは、軽作業などを通じて「働く実感」を得てもらっている。(鎌倉市由比ガ浜)

「医療機関や行政などを巻き込む地域の『核』になって、一人一人にとって的確なサービスを提供する。そして一人でも多くの障害のある方々が地域の中で生きる喜びを感じてもらいたい」。力強く前を見据えた。

その志を胸に市を退職。昭和60年、市内に障害者が働く場を立ち上げた。当初は障害者への理解不足から「なかなか建物を貸してくれず、途方に暮れた」(平塚さん)といい、自らが建物を購入して作業所開設にこぎ着けたケースもあった。

運営資金を切り詰めるため、今の事務所に置かれていた机や椅子の多くは職員らの手作りだ。

「テキパキとやっちゃおう」

支援センター内に元気のよい声が響きわたり、菓子を入れる紙箱をテーブルの上で手際よく組み立てている。作業はおしゃべりしながらで、みな笑顔に満ちていた。

紙箱組み立てといった軽作業、点字の書類、名刺などの製作にも取り組んでいる。

もう一つの柱となっ

「医療機関や行政巻き込む『核』に」

平成26年に障害者総合支援法が施行され、従来「精神・知的・身体」の3障害だった「障害者」の定義に筋ジストロフィーなど約200種の難病も加わったことから、相談範囲が広がった。ただでなく高い専門性も要求されるようになった。

だからこそ一人一人の声に丁寧に聞くことが求められ、「どのような暮らしを望んでいるかなど、まずは本人や家族らと話し合わなければならぬ」。

障害者が外出する際の移動支援や居宅介護、リハビリなど、「e-ライフサポート」設立当時にはなかったサービスが社会的に充実しつつあるが、「障害者がどのようなサービスを利用できるのか。これらの情報が不足しており、制度を十分生かし切れていない」とも感じている。

「医療機関や行政などを巻き込む地域の『核』になって、一人一人にとって的確なサービスを提供する。そして一人でも多くの障害のある方々が地域の中で生きる喜びを感じてもらいたい」。力強く前を見据えた。

横浜キワニスクラブ 第39回「キワニス社会公益賞」



第39回キワニス社会公益賞を受賞したNPO法人「e-ライフサポート」の平塚恵一理事長(右) 2日、横浜市区

キワニス社会公益賞授賞式

社会公益のために貢献してきた団体、個人に贈られる第39回キワニス社会公益賞(横浜キワニスクラブ主催)の授賞式が2日、横浜市内のホテルで行われた。障害者向け福祉サービスなどに取り組むNPO法人「e-ライフサポート」(鎌倉市)が受賞し、同クラブの栗飯原吉伸会長から賞状などが授与された。

e-ライフサポート理事長の平塚恵一さん(63)は「設立当初は障害者への理解不足から、建物を確保することも難しかったが、何とかここまでやってこ

e-ライフサポート

「障害者福祉に関連するさまざまな法整備が進むなか、民間の力がこれまで以上に必要となる。限らない将来を待っていると感じている」と力を込めた。

栗飯原会長も「30年以上にわたり障害者福祉に携わり、社会貢献を果たしてきた。さらなる発展を期待します」とエールを送った。

e-ライフサポートは障害者の生きがいづくりや働く場の提供に向け、福祉サービスや相談業務に取り組んでいる。

「障害者福祉、民間の力で」